

# 米国の20世紀初期の 幼小接続カリキュラムにおける音楽領域の特徴

— 幼稚園と小学校低学年のためのカリキュラムの分析をとおして —

井本美穂  
(2015年10月5日受理)

The Characteristics of Music Education in the Connective Curriculum between Kindergarten and Elementary School of United States in the Early 20th Century  
— Analyzing the curriculums for kindergarten and early elementary school —

Miho Imoto

**Abstract:** The purpose of this study is to clarify the characteristics of the music education in the curriculums which emphasized the connection between kindergarten and elementary school. Target curriculums are “The Kindergarten Curriculum, Kindergarten –First Grade– Curriculum”, and “A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade”. These curriculums were established in the early 20th century and made based on the idea of progressive education. As a result of comparative examination of these curriculums, the following characteristics of the music education of the curriculums became clear: (1) Aiming to develop social skills through music activities, (2) Training singing skills by dividing the class members into small groups based on pitch discrimination abilities and coaching individually, (3) Placing a high value on children’s self-motivation to cultivate the attitude to enjoy music by thinking and expressing by themselves. These curriculums indicated kindergarten teachers the necessity to educate intellectual aspects such as singing skills through music activities, and introduced some methods. At the same time, these curriculums showed primary school teachers possibilities of teaching intelligence aspects such as musical knowledge in playing.

Key words: connection between kindergarten and elementary school, music, U.S.A.

キーワード：幼小接続、音楽、米国

## 1. はじめに

本稿は、米国の20世紀初期に作成された幼小接続カリキュラムの音楽領域の内容を検討し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

20世紀初期は、米国の幼稚園教育が大きく変動した時期である。産業の発展による都市化や移民の流入などによる人口増加によって、幼稚園に通う子どもが急増し、幼稚園が次々と新設された。1873年には、セントルイスで幼稚園が公立学校制度に導入され、公

立学校幼稚園が誕生した。その後、公立学校幼稚園は全米に普及していった。当時は、幼稚園が活動中心であったのに対し、小学校は知識中心の教育を行っており、両機関の教育方法には大きな隔りがあった。そのため、幼稚園が学校制度の一部として設置されると、幼稚園と小学校第1学年との接続をいかに円滑にするかが問題となった<sup>1)</sup>。幼稚園教員には、学校教育機関における教員としての素養や能力が求められるようになり、小学校教員には、幼稚園での経験を活かした教育実践が求められるようになったのである。さら

にこの時期は、米国の幼稚園教育が、それまで主流であったフレーベル主義から、子どもの生活経験を基盤とした教育指針をもつ進歩主義教育へと移行する過渡期でもあり、教育思想の面でも大きく変化していた時期であった。当時の米国では、幼稚園の教育内容は各州の裁量に任されていた。しかし、1912年、1913年に行われた全米の幼稚園へのアンケート調査<sup>2)</sup>から、教育内容および方法が各幼稚園によって大きく異なることが明らかになり、米国全土において統一された幼稚園用の標準カリキュラムの作成が必要であるとの認識が高まった。以上のような経緯をふまえて、国際幼稚園連盟 (International Kindergarten Union)<sup>3)</sup> が連邦教育局 (Bureau of Education) と協力し、1919年に『幼稚園カリキュラム』(Kindergarten Curriculum)<sup>4)</sup> を発行した。このカリキュラムには、小学校低学年との接続を考慮して作成されたことが明示されている。さらに国際幼稚園連盟は1922年に、『幼稚園カリキュラム』と連続したカリキュラムとして『幼稚園と小学校第1学年のためのカリキュラム』(Kindergarten-First Grade-Curriculum)<sup>5)</sup> を発行した。一方、1923年には、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのヒル (Hill, P.S.) が『幼稚園および低学年のためのコンダクトカリキュラム』(A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade, 以下コンダクトカリキュラム)<sup>6)</sup> を発行した。これらのカリキュラムは、当時興隆していた進歩主義教育思想を基盤として作成されている<sup>7)</sup>。また、幼稚園と小学校低学年をひとつの構成単位と捉えて作成されており、カリキュラムには音楽も一領域として設定されている。このように幼小接続を図るカリキュラムのなかで、音楽領域はどのような特徴をもっていたのであろうか。

『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』の幼小接続に関する主な先行研究には、ラスカリデスとヒニッツ (Lascarides and Hinitz, 2000) による、『幼稚園カリキュラム』作成委員長を務めたシカゴ大学のテンプル (Temple, Alice) の幼小連携に関する理念についての論考がある。また橋川 (2003) は、両カリキュラムにおける幼小連携の原理について述べている。田中・橋本 (2012) は、米国で生じた幼小連携カリキュラム論の背景とその実践動向を概観し、両カリキュラムがプロジェクト活動を重視していたことを明らかにしている。しかし、いずれの先行研究も音楽の領域については言及していない。

一方、『コンダクトカリキュラム』に関しては、様々な角度から研究が行われている<sup>8)</sup>。音楽に関する先行研究としては、山浦・中村 (2000, 2001) が、『コンダクトカリキュラム』の音楽の部分および、同カリキュ

ラムの共同執筆者であるソーン (Thorn, Alice Green 1890-1942) によって書かれた *Music for Young Children* (Thorn, 1929) (以下、『幼児の音楽』) について、概要を紹介している。しかし、音楽の項目全体の内容分析および幼小接続に焦点をあてた分析は行っていない。そこで筆者はこれまでに、上記のカリキュラムの内容を明らかにし、進歩主義教育の影響について考察した (井本, 2014a, 2014b)。

本稿では、幼小接続の視点から上記カリキュラムの音楽領域の内容を分析し、当時の米国の幼小接続カリキュラムにおける音楽領域の接続の特徴を明らかにする。方法として、幼稚園児を主対象とした『幼稚園カリキュラム』と、小学校1年生を主対象とした『幼稚園と第1学年のカリキュラム』を連続したカリキュラムとみなし、内容分析を行う。さらにその内容を『コンダクトカリキュラム』の音楽領域の内容と比較し、幼小接続カリキュラムにおける音楽領域の特徴と意義を明らかにする。

## 2. 標準カリキュラムの礎を築いた『幼稚園カリキュラム』

### 2.1 『幼稚園カリキュラム』の概要

『幼稚園カリキュラム』は、米国で初めて幼稚園のための標準カリキュラムとして発行されたという点で、画期的なカリキュラムである。『幼稚園カリキュラム』作成委員会の委員長を務めたテンプルは、本カリキュラムの序文において、幼稚園教員と小学校教員が相互の業務についての情報および知識をもっていないことが、幼稚園と小学校との接続に関する問題の原因となっていると指摘している<sup>9)</sup>。そのうえで、幼稚園と小学校低学年教育との円滑な接続を実現するためには、幼稚園教員と小学校教員が互いの業務に関する理解を深め、さらに共通した教育理論と教育方法を持つことが必要であると述べている<sup>10)</sup>。また、本カリキュラムの対象年齢は4歳から6歳までであるが、心理学的には4歳から8歳までの時期は成長過程における発達期の観点から一つの時期として捉えられることを示し、幼稚園と小学校低学年の教育方法は共通の一般的特質を有するべきであるとしている<sup>11)</sup>。

続いて、本カリキュラムの総論において、子どもにとって必要な経験は、次の3点をとおして得られることが示されている。(1) 自然の事物や現象に触れること (自然学習)、(2) 人間や人間の活動に触れること (家庭と地域社会)、(3) 人間の知の産物に触れること (文学、音楽、芸術など)<sup>12)</sup>。

そして、上記の経験を得るための活動内容は、1)

地域社会の生活と自然学習、2)手工活動、3)美術、4)言語、5)文学、6)遊びとゲーム、7)音楽、の7領域に分類されている。

さらに、それぞれの領域において「全体的な目的」と「具体的な目的」が示され、その目的を達成するための「題材」と「方法」が提示されている。そして最終的な「到達目標」が「態度・興味・好み」「習慣・技術」「知識・情報」の3つの観点から提示されている。

## 2.2 『幼稚園カリキュラム』の音楽領域の内容

『幼稚園カリキュラム』の音楽領域では、発達段階別の分類、歌唱など活動領域による分類は行われていない。本カリキュラムの音楽領域の目的と到達目標は表1のとおりである。

目的と到達目標の内容をみると、本カリキュラムでは主に「歌唱」「リズムへの反応」「創作」の活動をととして基礎的な音楽能力を身につけること、および音楽経験のなかで社会性を育成することをめざしていることがわかる。目的と到達目標を達成するための具体的な方法は次のとおりである（井本、1914b, pp.4-8）。以下、内容を検討していく。

本カリキュラムにおいて最も詳細に方法が記述されている活動は、歌唱である。歌唱に際しては、個人または小グループでうたう機会をつくることの必要性が強調されている。具体的には、子どもに歌唱テストを行い、聴こえた音高に合わせてうたえる能力別に3つの小グループに分け、各能力に応じた歌唱指導を行う。音の高低を識別する能力を養う方法として、はじめは教師がうたう2つの音を聴き、その高低を識別する。少しずつ音の数を増やして、高さについての認識を深める。

うたう曲に関しては、非常にシンプルな特徴（very simplest character）の歌を選択することが推奨されている。例えば、ある歌の一部で、その部分自身が完結しているようなもの（Good bye to you, Good bye, Good bye など）を用いる。

また「集団でうたうことの社会的な要素は、音楽の主要な価値のひとつである」<sup>13)</sup>として、歌唱は社会性を養ううえで最も貢献できる活動として位置づけている。

一方で、集団での歌唱教育だけでは、歌の技術の向上を目指すには不足があり、ひとりですうたうことで、自分の声の質を聴くことができるようになることを示している<sup>14)</sup>。以上をふまえて、歌唱活動においては、歌の技術向上をめざす場面と、社会性をのばすうえで音楽経験を用いる場面を区別して行う必要があることを指摘している<sup>15)</sup>。

表1 『幼稚園カリキュラム』音楽領域の目的と到達目標

目的	
全体的な目的	1. 歌いたいという欲求を起こす。 2. 音楽（声および楽器による）を愛する心を育む。 3. 音楽経験を共有することを通して、社会性を養う。 4. 主題をより生き活きとおもしろくする。
具体的な目的	1. 明るい頭声で、フレーズをなめらかにうたう。 2. リズム感覚を向上させる。 3. メロディーを再現したり、オリジナルのメロディーを考えて声にだすよう導く。
到達目標	
態度・興味・好み	- 音楽を聴くことおよびメロディーを声にだすことに興味をもつ。 - 学校に入る前に、平均的な子どもが聴いていたより高いレベルの音楽に関して新しい興味を持つ。
習慣・技術	- 明るく、はっきりとした音高をだす。 - フレーズをつなげてうたう。 - 正しいフレージングをおこない、息継ぎのコントロールを習得する。 - 低すぎるキーで歌い始めたとき、自分でメロディーのピッチをかえる。
知識・情報	- 様々な方法で新しいリズムに反応する力。 - 特徴的なモチーフを区別する力。 - いくつかの簡単な歌を一人でうたう力。
題材：歌の分類	
1. 家族の歌 2. あいさつのうた 3. 賛美歌	4. お祭りの歌 5. 天気之歌 6. 愛国的な歌
7. 仕事の歌 8. 季節の歌	

(Kindergarten Curriculum, pp. 61-68より作成・井本、1914bより抜粋)

また、歌唱に関しては、技術面に関する記述が多い。しかし、すべての歌唱活動は、楽しんでできるように配慮することが強調されており、そのため、ドリルを最初に使用することは禁じられている。

次に本カリキュラムで重点がおかれているのは、リズムに反応する活動である。リズムに反応する方法としては、身体による反応と楽器による反応の2種類が示されている。身体による反応とは、音楽にあわせて体でリズムカルに反応すること（マーチング、スキップ、走るなど）である。例えば、曲の速さや雰囲気に合わせて、重い足どりで歩いたり、その場で飛び跳ねたりグルグル回ったりする。また、歌のリズムや指揮にあわせて手拍子をするなどである。

楽器を用いて音楽にあわせて反応する具体的な例

は、簡易楽器を用いたバンドで、すべての楽器が一緒に間を合わせる、グループで楽器を鳴らす際、リーダーに合わせるなどである。また音楽を聴いて、楽器を用いて、音の軽い部分と重い部分を区別して表現する。

こうして、身体や楽器を用いて音楽に反応することで、子どものリズム感覚を養うことが目指されている。

さらに、本カリキュラムには「創作」につながる活動も組み込まれている。幼稚園の段階では、既存のメロディーを再現することからはじめ、その後オリジナルのメロディーを創作して声にだすよう導く。こうしたプロセスを経ることにより、自発的に子ども自身の発想による短いメロディーが生まれてくる。例えば“Good morning to you”や“I am here”といったフレーズを用いた点呼に対して、子どもが自分でつくったメロディーで応える。こうした創作を行うためにも、歌唱は少人数または個人で行うことが必要であるとしている<sup>16)</sup>。教師は、自由に創造性豊かに作業をするよう働きかけ、子どもが創作したメロディーを記録して歌やピアノで再生するなどの援助を行う。このような方法をとおして、次第に子どもたちは、即興的に短いメロディーを作曲できるようになるとしている<sup>17)</sup>。

以上の歌唱、リズム反応、創作の活動全体に関わる活動として、聴くこと（listening）が挙げられている。「歌を聴く」「楽器演奏を聴く」ことにより、子どもたちが音楽に対してより親近感をもつことが示されている。ただし、聴取は受動的なものではなく、歌唱、リズムへの反応、および創作という活動のなかで行うこととされている<sup>18)</sup>。

幼稚園で聴く音楽は過度に高尚でも、低俗であってものならないことが示されている。適切な曲は、幼稚園で用いるために作られた楽曲、および単純（simple）な曲であることが述べられ、具体例としてシューベルトの軍隊マーチ、メンデルスゾーン「春の歌」、グリーグの「春によせて」などが挙げられている<sup>19)</sup>。また、季節や行事にあわせた音楽を聴くことにより、音楽を分類する能力（たとえば子守唄、ダンス用の曲、教会音楽、軍隊用の音楽など）が育成されるとしている<sup>20)</sup>。

### 3. 幼稚園の経験を活かす『幼稚園と第1学年のカリキュラム』

#### 3.1 『幼稚園と第1学年のカリキュラム』の概要

『幼稚園と第1学年のカリキュラム』は、小学校第1学年用のカリキュラムとして、『幼稚園カリキュラム』と同じ原理、構想のもと、『幼稚園カリキュラム』に連続するものとして作成された<sup>21)</sup>。作成にあたって

は、内容が重ならないように配慮するとともに、より実際の事項を記載したことが明記されている<sup>22)</sup>。対象は、主に小学校第1学年を担当する教師、および幼稚園と小学校低学年を担当する指導主事（supervisor）である。さらに、幼稚園の教師にとっても、自らの仕事が小学校での活動の準備としていかに機能するかを知るうえで価値があると記されている<sup>23)</sup>。本カリキュラムには、上述した『幼稚園カリキュラム』の領域に加えて「読み」「書き」「数」の領域が設けられている。

国際幼稚園連盟教育局委員会の委員長であるヴァンデウォーカー（Vandewalker, Nina, C.）は、『幼稚園と第1学年のカリキュラム』の序文のなかで、4歳から8歳までの時期を心理学的にひとつの構成単位として捉えるという認識が一般に認められてきたと述べている<sup>24)</sup>。この認識に基づき、本カリキュラムは、幼稚園教員と小学校教員が共通の問題に取り組み、両機関の接続を円滑に進めることをめざして作成された<sup>25)</sup>。これまでの小学校1年生の伝統的なカリキュラムは、内容が味気なく、学習の手段しか扱っていなかった。しかしこれからは、こうした伝統的なカリキュラムから脱却し、現代の教育思想に基づき、子どもの興味と経験を基盤としてカリキュラムを考えるべきであると記述されている<sup>26)</sup>。そして、本カリキュラムでは、新しい教育思想に基づく学習を推進するため、特に教材の強化を図ったことが述べられている<sup>27)</sup>。

なお、本カリキュラムは『幼稚園カリキュラム』の作成委員と協力して何度も検討を重ね、連邦教育局からの意見・批評をとり入れながら作成されたことを示し、『幼稚園カリキュラム』との関連の深さおよび連続性を強調している<sup>28)</sup>。

#### 3.2 『幼稚園と第1学年のカリキュラム』の音楽領域

本カリキュラムでは、それぞれの領域のカリキュラム内容を代表執筆した人名が、各領域のカリキュラムの冒頭に記載されている。音楽領域を代表執筆したのは、作成委員の一人であるエシカル・カルチャー・スクールのブラウン（Brown, Corinne）である。音楽領域の内容は表2のとおりである。

本カリキュラムにおける音楽領域の役割は、家庭では容易に経験できない社会的・文化的経験の機会を、子どもに提供することである<sup>29)</sup>。ブラウンは、幼稚園と小学校第1学年における音楽との関わり方の違いを以下のように指摘する。「幼稚園では、歌とリズム活動をとおして、音楽表現に参加する機会を提供する。幼稚園の教師は、ドリルよりも芸術面の観点から子どもの興味・関心に基づいて歌を選曲する。また、幼稚園の部屋は家具の移動が容易で空間を自由に使用できるため、小学校ではほとんどできないリズム活動を行

うことができる。こうして幼稚園ではまず、子どもたちに音楽への好みと表現力を育み、音楽の理論的な内容に関する教育を受ける基盤をつくる。そして小学校第1学年から、音楽の理論的な面を学習していくことになる」<sup>30)</sup>。

表2 『幼稚園と第1学年のカリキュラム』の音楽領域の目的と到達目標

	目的
全体的な目的	1. 音楽を愛する心と喜びを高める。 2. よい音楽 (good music) への好みを深める。それは良い音楽を知ることによってのみ可能である。
具体的な目的	1. 歌うことの楽しさを促進する。 2. リズムとダンスをとおして、平衡感覚と身体のコントロール力を高める。 3. 歌とダンスを創作する力を育む。 4. 音楽、メロディー、リズムの基本について意識し、その構成要素の部分、音高、拍、拍の持続時間について意識するようになる。
	到達目標
態度・興味・好み	- 音楽の基本を知的に鑑賞 (appreciation) すること。 - 子どもが自分のレベルで最も良い音楽 (best in music) を好むこと。
習慣・技術	- やさしく、はっきりとうたうことができる。 - 音高、リズム、長さの違い、またその違いの程度を認識し、こうした違いをおおまかに示すことができる。 - 譜表、拍子記号、音符などの意味を理解することができる。 - 身体のバランスと統制ができる。
知識	- 多くの良い (good) 現代の歌やフォークソングを知ること。 - 様々なリズムミカルな作品を知る。 - 音楽が表現する雰囲気を認識し、特定の場面でこうした表現が適切に用いられていることを理解する。

(Kindergarten-First-Grade Curriculum, pp. 61, 65-66 より作成・井本, 1914b より抜粋)

さらにブラウンは、「小学校第1学年では、子どもたちがこれまで自然発生的に行っていたことに対して、プロセスを意識する必要がある。そして、子どもが知的に参加していることを自覚できるよう、注意深く実践することが必要である」<sup>31)</sup> とし、幼稚園から小学校へ移行する際の注意点を指摘している。しかし、音楽の理論的な面を教授する際にも、音楽への好みと表現力はひき続き育成すること、および活動は楽しく

行い受動的にならないよう考慮することが必要性であることを強調している。具体的な内容は次のとおりである。

まず、歌唱における目標は、よい (good) 歌を暗誦し、その歌を正しい音高でうたうこと、声はやわらかく、はっきりと聴こえるぐらいの大きさで、無駄な息づかいが混ざっていないことである。歌唱活動は、1日10分程度行うことが望ましいとしている。本カリキュラムは『幼稚園カリキュラム』に比べ、用いる歌の条件に関する記述が多い。歌の教材に関しては、陽気で (merry) 子どもらしい雰囲気 (childlike mood) であるか、または簡単な物語になっていることを条件とし、明るくユーモアのある (lively humor) 民謡などを薦めている<sup>32)</sup>。子どもの理解できる歌詞で、経験したことがある、あるいは想像できる内容の歌を選曲することが重要である。そのため、感傷的な歌や回顧的な歌など、幼少期の子どもの理解を超えている歌詞の歌は選ぶべきではないことが示されている。

次に、リズム活動に関しては、『幼稚園カリキュラム』で示されたスキップや走るなどの簡単なステップと、カドリールなどのフォークダンスのリズムを組み合わせる事が提案されている<sup>33)</sup>。ただし、小学校第1学年の段階では、正式なフォークダンスのように正確にリズムをとることをめざすのではなく、様々なリズムを体験することそのものを目的とする。この体験は、作曲や、フォークダンスのリズムを活かした曲 (チャイコフスキーのユーモレスク、シューベルトの楽興の時など) の鑑賞など、その後の音楽活動に役立つとしている<sup>34)</sup>。また『幼稚園カリキュラム』では、音楽にあわせてリズム感覚を養うことが目標とされていたが、本カリキュラムでは、リズム活動を用いて身体感覚を養うという目的が付加されている<sup>35)</sup>。すなわち、音楽活動は、身体の平衡感覚や自分で身体を制御する力をつけるという、身体能力の発達を促進する役割も担うことが示されているのである。

さらに、「創作」に関わる内容としては、子どもに歌詞つきの短い歌を作曲させることが推奨されている<sup>36)</sup>。作曲に際しては、作りたいという強い動機をもたせることが重要であり、贈り物もらった、赤ちゃんが誕生した、ピクニックに行ったなど、特別な出来事があった時に、音楽表現への意欲が高まると述べられている。『幼稚園カリキュラム』では、即興的にメロディーを作ることがめざされていたが、本カリキュラムでは、目的をもって創作を行う段階へと進んでいることがわかる。

もうひとつの創造的な音楽表現は、子どもにメロディーを聴かせ、そのメッセージをくみ取り自作のダ

ンスで表現するというものである。この表現方法は、先に述べたリズムへの反応とも相互に関連づけることができるとしている<sup>37)</sup>。

教師には、子どもたちに強制的に創作させるのではなく、子ども達の自発性を尊重し、楽しく音楽と関わられるように働きかけることが求められている。

また、本カリキュラムでは、「音楽の聴取 (listening) によってこそ鑑賞は成り立つ」と、聴取が鑑賞力に結びつくことを明確に明記している<sup>38)</sup>。さらに、受動的な聴取よりも、参加を通じた聴取によって鑑賞の喜びは高まるため、あえて特別に「聴取の時間」というものは設けていないことが述べられている。

次に、本カリキュラムが『幼稚園カリキュラム』と最も異なる点は、音楽の理論的な面の学習に関して詳細に記述されている点である。内容は、音の長さ、音高、拍の学習方法が中心となっている。

まず音の長さに関しては、子どもが以下のような歌のフレーズを学習する際、教師は各音の長さを正確に手拍子で示す。



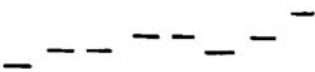
また、黒板に次のように音の長さを書き、音の長さの違いを示す。子どもは自分で音の長さの違いを手拍子できるように練習する。



様々なリズムの歌を用いて以上のような練習をし、音の長短の認識を深める。

注意事項として、「美的鑑賞にとって退屈は死に等しい」<sup>39)</sup>として、こうしたドリルは退屈しないよう配慮しながら進めることが重要であることが示されている。

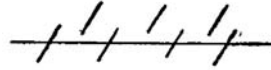
音高については、まず教員が1オクターヴまたは6度の2音をうたい、どちらの音が高いかを聴き分ける。その聴き分けができるようになると、少しずつ2音の音程の幅を狭くしていく。次に、音を増やし、3音の音高を聴き分ける。この過程は1～2週間で達成できるとしている。次の段階では、歌のフレーズを用いて、次の音が前の音より高いか低いかと問う。子どもの答えに応じて、黒板に次のように音の高低を記していく。



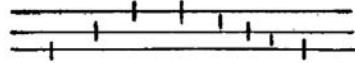
この段階では、リズムや音の相対的な距離に注意することはせず、音の高低が理解できればよい。この段

階に至るまでに、約半年かけることが示されている。

その後、ドレミファ音節の学習を始める。方法として、はじめはドとレの音のみの歌を用いて、黒板上でまずドの音に線をひく。その上の余白にレの音を書く。



その後、少しずつ線を増やし、ミヤソの音を記していく。こうして五線譜が読める力を徐々につけていく。



拍については、歌の強拍の部分のみ手拍子をする。その後、歌詞を黒板に書き、歌詞の上に強拍の部分を「1」と記し、2拍子であれば「1, 2」、3拍子であれば「1, 2, 3」と歌詞に対応する拍子番号をふる。さらに強拍「1」の部分の前に縦線をひき、区切りをつけていく。こうして子どもは、拍を区別するには方法があることを学ぶ。こうして、小学校第1学年では、楽譜を読む前段階として、音高とリズムの違いを聴き分ける力をつけることがめざされている。

以上、『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』を比較しつつ検討した。

次に、上記カリキュラムと同時期に発行された『コンダクトカリキュラム』の内容を考察する。

## 4. 習慣形成を重視した『コンダクトカリキュラム』

### 4.1 『コンダクトカリキュラム』の概要

コンダクトカリキュラムは、ヒルがコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園の幼稚園と同初等学校の第1学年を対象として行った実験成果をもとに作成された。実験は1905年に始められ、一時中断した後1915年に再開された。実験では、教師は命令者であるよりも案内人であるという考えのもとに、教授の技術を生み出すことが試みられた。選択と決定は可能な限り子どもたちに委ねられ、自分で目的および計画をたて、実行することに重点が置かれた。子どもたちは相互に、自らの経験を通して学ぶ幅広い機会が与えられた<sup>40)</sup>。この幼稚園で子どもの変化を観察し、子どもの個人的・社会的行為の典型的な成果と考えられるものが記録されていった。それをもとに、子どもが身につけるべきである「習慣目録」が作られた。この目録を基盤として、子どもの思考・感情・行為の諸活動を望ましいものにする「習慣形成」の内容がコンダク

トカリキュラムとしてまとめられた。このカリキュラムは、一連の活動を通して、各分野の知識・技能の習得に加えて、自己抑制力や他者との協調性を獲得させることを目標としている。そのため望まれる学習効果として、集団内での責任性や協働性、公平性といった社会的・道徳的内容が多く記述されている<sup>41)</sup>。

カリキュラムの内容は、日常的な活動や手作業（積木、手遊び玩具、砂、美術と工芸）などの「作業時間」が基本に据えられ、そこから文化的な内容を含む多様な「朝の時間の他の活動」（間食、衛生と安全、音楽、遊びと遊戯、絵描き、言語、文学と文庫、読み方、書き方、数字、社会研究、自然研究、見学）へと広がるよう編成されている。音楽は「他の活動」のなかに含まれている。しかし、1日30分行われることになっており、全体の時間割のなかでみると、多くの時間を占めている。以降、音楽領域の内容について検討していく。

#### 4.2 『コンダクトカリキュラム』の音楽領域の内容

『コンダクトカリキュラム』の「他の活動」に含まれる項目のうち、半数の項目は年齢段階別に活動内容が示されているが、音楽の項目は、年齢別による記載はされていない。

また、幼稚園における音楽教育の目的については明示されていない。しかし、『コンダクトカリキュラム』の音楽に関する部分を詳細に解説している『幼児の音楽』<sup>42)</sup>に記載されたヒルとソーンの序文から、著者らが幼児教育における音楽についてどのような思想をもっていたのかを知ることができる。ヒルは、音楽はすべての芸術のなかでも最も人間の心身への影響力が強いと述べている<sup>43)</sup>。ヒルは特に、声のトーン的重要性を指摘している。子どもは、声のトーンから感情の状態を読み取る。トーンは話し言葉にも歌声にも影響を与えるため、トーンを作り出す技術の学習に十分な時間をかけるべきであると述べている<sup>44)</sup>。また、子どもが自由に音遊びすることを妨げてはいけないと述べ、自発的な活動の重要性を強調している<sup>45)</sup>。さらにヒルは、教養としてベートーヴェンやモーツァルトなどの曲を知っておくべきであると考えていた<sup>46)</sup>。そして、大人になって音楽鑑賞を楽しめる能力を身につけることを目指すと述べている<sup>47)</sup>。

一方、ソーンは「音と動きは子どもの生活で最も興味を持つ要素である」<sup>48)</sup>と述べ、子どもの興味の観点から、幼児期の音楽教育が重要であると説いている。また、子どもの音楽経験および音楽能力は様々であるため、すべての子どもを同じ型にはめて教えるべきではないと強調している。大切なのは、演奏をすることで音楽に興味を持ち、楽しさを味わうことであると述

べている<sup>49)</sup>。また、「音楽の機能は、人の感情の要求に応じて、その人を明るくしたり、落ち着かせたり、刺激したり、元気づけたりすることである。すべての子どもは、音楽教育をとおして、現在および将来の生活において音楽の機能を活用できるようにならなければならない」<sup>50)</sup>と述べ、音楽教育の目的が、生涯にわたって音楽を楽しむ力をつけるためのものであることを示している。以上より、ヒルおよびソーンの考える音楽教育の長期的な目標は、生涯をとおして音楽を鑑賞できる力をつけることであつたといえる。

次に、本カリキュラムの音楽領域は、以下の4分野に分類されている（井本、2014a, p.41）。

- 1) 音楽に対するリズム的反応（身体の動きによって）
- 2) 音楽に対するリズム的反応（楽器によって）
- 3) 歌
- 4) 鑑賞

各分野では、まず「素材」が示され、各素材を用いて行う「代表的な活動」と、それを通して獲得する「思考・感情・行為の望ましい変化」が記述されている。活動内容が明示され、それぞれの活動がもたらす望ましい変化が併記されている点は、『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』と異なる部分である。

1) 音楽に対するリズム的反応（身体の動きによる）については、「演奏された音楽に耳を傾ける」ことにより「音楽を注意深く聴くことができる」ようになる、「身体のリズム的な動きによって音楽に自由に反応する」ことにより「運動制御能力（バランスと安定感）を発達させる」、「様々な種類の音楽に対して個人としてもグループとしても反応する」ことにより「各自音楽を認識し（速度、強弱、雰囲気の違いなど）、リズム的に表現する。リズム反応を楽しむ」という望ましい変化が提示されている<sup>51)</sup>。リズム活動をとおして、子どもの興味を促進すること、自分の動きをコントロールできるようにすること、今後の音楽の学習に必要な基礎を身につけることがめざされている。加えて、「大きなグループの中でも他人の邪魔をしないで遊ぶことができる」「援助の必要な子どもを快く助ける」といった、社会的習慣を身につけさせる項目も記載されている<sup>52)</sup>。

2) 音楽に対するリズム的反応（楽器による）については、「思考・感情・行為の望ましい変化」の項目に、集団内での自己抑制力や他者との協調性に関する内容が特に多いことに気づく（表3参照）。先に述べたように、グループ経験をとおして、社会的習慣を会得することに重点がおかれていることがわかる。

3) 歌の事項では、様々な歌をうたうことに加えて、

「音で実験する」「音と遊ぶ」「歌の創作」など、音を用いて子ども自身に音楽を作らせることを試みている。

これは、コンダクトカリキュラム全体を通して重点がおかれている「自らの経験をおして学ぶ」という理念が反映されたものと考えられる。また、『幼稚園カリキュラム』と同じように、子どもの歌唱能力に応じてグループ分けをすることが提示されている。歌う歌は、「子どもらしいもの」でなければならないとしている<sup>53)</sup>。ここでいう「子どもらしい歌」とは、「子どもたちの経験や感情を表現したもの」であり、感傷的、象徴的、大人の心情を表した歌は用いるべきではないと述べられている<sup>54)</sup>。この点は『幼稚園と第1学年のカリキュラム』と同様の考えに基づいているといえよう。

4) 鑑賞の項目には、「音楽を鑑賞させることの目的は、子どもたちの音楽経験を増やし豊かにして、よい音楽を聴くことに興味をもたせることである」<sup>55)</sup>と、目的が記載されている。『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』には、聴取の必要性が記述されていたが、それは能動的な活動のなかで音楽を聴くことであった。一方、本カリキュラムでは「鑑賞」の項目が設けられ、「静かに注意して聴く」<sup>56)</sup>ことが求められている。鑑賞においても、「単純で子どもらしい」曲を選択することが大切であると強調されている。聴いた音楽について、「自分で独創的な解釈をし、それを動作で表現する」ことで「それぞれの音

楽が持つ特徴を認識し、その雰囲気表現する能力を得る」ことがめざされている<sup>57)</sup>。この点にも、子どもの創造性を尊重する姿勢があらわれている。また、「数種類の曲名をおぼえる」「作曲家の名前に親しみを覚える」などの項目があり、先に述べた、音楽を教養としてとらえている面が浮き彫りとなっている。

## 5. 20世紀初期の米国の幼小接続カリキュラムにおける音楽領域の特徴

『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』『コンダクトカリキュラム』を比較検討した結果、20世紀初期の米国の幼小接続を重視したカリキュラムの音楽領域の特徴は、以下にまとめることができる。まず、すべてのカリキュラムに共通している特徴は、音楽活動をおして社会性の育成をめざしている点である。歌や器楽バンドでのグループ活動は、子どもの社会的な習慣形成をする場としての役割を与えられている。

一方、単に社会性の育成を目的としているだけではなく、音楽の技術面の向上もめざしている。例えば歌唱については、能力別にグループに分け、集団で歌うよりも、個人または小集団で自分の声をしっかりと聴き、音程をあわせることが重視されている。各カリキュラムで最も重点がおかれているのは、音楽に合わせて身体を動かしたり、即興的うたうなどの活動をおして音楽で遊び、音楽表現をする楽しさを味わうこと

表3 『コンダクトカリキュラム』の音楽領域：音楽に対するリズム的反応（楽器によって）

素材	
リズムのために 太鼓、シンバル、ガラガラ、サンドペーパーブロック ベル、トライアングル、タンバリン	メロディのために トイピアノ（大、小）、シロフォン、 チューバフォン（訳注：金属製パイプで作られた鍵盤打楽器） 水を注いだグラス
代表的な活動	思考・感情・行為の望ましい変化
<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽に対してリズムカルに反応する。               <ul style="list-style-type: none"> <li>(a) バンド用の楽器を使って                   <ul style="list-style-type: none"> <li>個人的に（ソロ）</li> <li>小グループで（3人、4人）</li> <li>大グループで（バンド）</li> </ul> </li> <li>(b) 指揮することによって</li> </ul> </li> <li>バンドの使用楽器の種類によって組み分けをする。               <ul style="list-style-type: none"> <li>ベルとトライアングル</li> <li>シンバルと太鼓</li> <li>タンバリン</li> <li>ガラガラとサンドペーパーブロック</li> </ul> </li> <li>様々なタイプの音楽に反応する。</li> <li>次の差異をしっかりと表現する。               <ul style="list-style-type: none"> <li>速さ、強弱、形式</li> </ul> </li> <li>トイピアノ、シロフォン、チューバフォン、水を注いだグラスを用いる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽器を使う楽しさ。</li> <li>バンドの中で演奏する楽しさ。</li> <li>次の事項についてある程度の規則を作り、それに従うことを学ぶ。               <ul style="list-style-type: none"> <li>(a) バンドの組織                   <ul style="list-style-type: none"> <li>楽器の持ち出しおよび後片付けを静かにする。</li> <li>楽器を適切な持ち方で持つ。</li> <li>始めるのもやめるのも、指揮者の合図を待つ。</li> <li>演奏中も指揮者に注意している。</li> <li>バンドの並びを保つ（半円形）。</li> </ul> </li> <li>同じ種類の楽器は一緒に並ぶ。</li> <li>(b) 自分の好きな楽器でも他人と共に使用する。</li> </ul> </li> <li>指揮も交代にする。</li> <li>他人が演奏している時は聴く。</li> <li>楽器を大切に扱わなければならないことを学び、実践する。</li> <li>次のような楽器でメロディーを演奏することを学ぶ。</li> <li>シロフォン、グラス、トイピアノ</li> </ul>

(A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade, pp. 61-62. より作成, 井本, 1914aより抜粋)



である。しかし、ただ楽しむだけで終わるのではなく、幼稚園の段階から、音楽の技術的な面に対する個別指導も行う点が、20世紀初期の幼小接続カリキュラムの音楽領域の大きな特徴といえる。

次の特徴として、子どもの自発性を重視している点が挙げられる。これは、進歩主義教育思想を基盤としていることに起因すると考えられる。リズムに自由に反応する、歌をつくるなどの活動にみられるように、子どもが自分自身で考えて音楽を表現し、音楽を楽しむ態度を養うことが目指されている。

また、用いる音楽は、子どもの経験および発達段階に即した、表情豊かでありかつ単純な曲であることを強調しており、子どもの経験に基づく学習を重視しているこれらのカリキュラムの理念が反映されている。

活動領域としては、『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』では「歌唱」「リズムへの反応」「創作」が基本となっており、これらの活動をととして聴取力を獲得することがめざされている。さらに『コンダクトカリキュラム』では、音楽鑑賞が項目として加わっており、子どもの音楽経験を増やし豊かにすることが目標とされている。

『コンダクトカリキュラム』には、段階別の記述はないが、『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』においては、自然に生まれた歌やリズムへの反応から、しだいに目的をもった歌作りや身体表現へ移行するよう、教育方法が工夫されていることが特徴であるといえる。

以上の特徴をふまえ、これらのカリキュラムは、幼稚園教員に対しては、ただ活動するだけではなく音楽技術などの知的な面を教育する必要性と方法を提示し、また小学校教員に対しては、音楽知識や技能の教授に際しても、遊びをととした方法が可能であることを提供することで、円滑な幼小接続の実現への扉をひらいたといえよう。

## 【注】

- 1) 米国の幼稚園が公立学校制度に導入された過程については、バンデウォーカー著、中谷彪監訳（1987, pp.163-203）、および滝沢和彦「公立幼稚園の発達」（1988, 阿部真美子他編『アメリカの幼稚園運動』, pp.25-35）で詳しく論じられている。
- 2) Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1914) *Kindergartens in the United States – Statistics and Present Problems*, Department of the Interior Bureau of Education Bulletin, 1914, No. 6., pp.16-92.
- 3) 幼稚園に関する情報収集・人的交流・幼稚園普及・

教員養成の質の向上を目的として、1892年に全米教育協会（National Educational Association）の幼稚園部会において設立が決定された非政府組織。保育者養成基準の設置、保育カリキュラムの作成など、保育の専門性の確立につながる取り組みを行った。主な構成員は、保育者、保育者養成者、幼稚園指導主事、研究者であり、結成時は会員数30人であったが、1915年には19,000人を超えている。国際幼稚園連盟の沿革および活動については、北野（2001, pp.165-226）によって明らかにされている。

- 4) Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1919) *The Kindergarten Curriculum*, Department of the Interior Bureau of Education Bulletin, 1919, No. 16.
- 5) Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1922) *A Kindergarten -First-Grade Curriculum*, Department of the Interior Bureau of Education Bulletin, 1922, No. 15.
- 6) Hill, P.S. (edit.) (1923) *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, Charles Scribner's Sons.
- 7) これらのカリキュラムと進歩主義教育との関連性については、坂田（1973）、杉浦（1996, 2000）、滝沢（1996）、橋川（1998）、田中・橋本（2012）などによって明らかにされている。また『幼稚園と第1学年のカリキュラム』では、本カリキュラムがプロジェクト型のカリキュラムであることが明記されている（Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union, 1922, p.V）。
- 8) 坂田（1973）、杉浦（1996, 2000）、滝沢（1996）、橋川（1998）などがある。
- 9) Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1919), op.cit., p.5.
- 10) Ibid., p.6.
- 11) Ibid., p.6. テンプルは、"The Kindergarten-Primary Unit: Part" の論文のなかで、4歳から8歳までに共通する特徴を、模倣性、感覚運動性、社会性、身体活動の面から提示している。
- 12) Ibid., p.9.
- 13) Ibid., p.63.
- 14) Ibid.
- 15) Ibid.
- 16) Ibid., p.67.
- 17) Ibid.
- 18) Ibid., p.62.
- 19) Ibid.
- 20) Ibid.
- 21) Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1922), op.cit., p.V.
- 22) Ibid.
- 23) Ibid.

- 24) Ibid.  
 25) Ibid., p.VI.  
 26) Ibid., p.V.  
 27) Ibid.  
 28) Ibid., p.VI.  
 29) Ibid., p.61.  
 30) Ibid.  
 31) Ibid.  
 32) Ibid., p.62.  
 33) Ibid.  
 34) Ibid.  
 35) Ibid.  
 36) Ibid.  
 37) Ibid.  
 38) Ibid., p.65.  
 39) Ibid., p.63.  
 40) Hill, op.cit., p.iv.  
 41) 『コンダクトカリキュラム』の特質については、杉浦（2000）によって詳細に論じられている。  
 42) 著者であるソーンは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園の教諭を務めており、コンダクトカリキュラムの執筆者の1人である。『幼児の音楽』は表題の前に「幼児教育シリーズ」パティ・スミス・ヒル監修との記載があり、コンダクトカリキュラムの叢書であることが示されている。また序文をヒルが書いている。ソーンは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園等での実践経験の成果として『幼児の音楽』を書いたと述べている（Thorn, 1929, Preface）。以上から、本稿では本書をコンダクトカリキュラム「音楽」の具体的な実践事例を示したものと捉え、コンダクトカリキュラム「音楽」の内容説明に用いることとする。  
 43) Thorn, op.cit., p.ix.  
 44) Ibid., p.x.  
 45) Ibid., p.xiii.  
 46) Ibid., p.xv.  
 47) Ibid.  
 48) Ibid., p.1.  
 49) Ibid., p.2.  
 50) Ibid.  
 51) Hill, op.cit., pp.58-59.  
 52) Ibid., p.59.  
 53) Ibid., p.61.  
 54) Ibid.  
 55) Ibid., p.63.  
 56) Ibid.  
 57) Ibid.
- 井本美穂（2014a）「米国の20世紀初期における幼稚園の音楽教育に関する研究：A *Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade* を中心に」音楽文化教育学研究紀要（26），pp.39-46。  
 井本美穂（2014b）「米国の20世紀初期における幼稚園音楽カリキュラム：『幼稚園カリキュラム』『幼稚園と第1学年のカリキュラム』における音楽の位置づけ」音楽学習研究：音楽学習学会紀要10，pp.73-84。  
 北野幸子（2001）「世紀転換期アメリカにおける幼児教育専門組織の成立と活動に関する研究：領域の専門性の確立を中心に」広島大学博士論文。  
 Lascarides, V.C. and Hinitz, B.F.(2000) *History of Early Childhood Education*, Routledge.  
 Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1919) *The Kindergarten Curriculum*, Department of the Interior Bureau of Education Bulletin, 1919, No. 16.  
 Subcommittee on Curriculum of the Bureau of Education Committee of the International Kindergarten Union (1922) *A Kindergarten -First-Grade Curriculum*, Department of the Interior Bureau of Education Bulletin, 1922, No. 15.  
 Vandewalker, N.C.(1908) *The Kindergarten in American Education*, MacMilan Company. 翻訳版は、ニーナ・C・バンデウォーカー著、中谷彪監訳（1987）『アメリカ幼稚園発達史』教育開発研究所。  
 坂田嘉郎（1973）「アメリカ幼稚園運動におけるプログレッシブ幼児教育論－P.S.ヒルを中心として」『聖和女子大学論集』第3号，pp.35-51。  
 杉浦英樹（1996）「プロジェクト法の源流（1）：コロンビア大学附属スベイヤークの幼稚園カリキュラムとP.S.ヒル」『上越教育大学研究紀要』16(1), pp.139-159。  
 杉浦英樹（2000）「プロジェクト法の源流（2）：コロンビア大学附属ホーレスマン校と『コンダクトカリキュラム』」『上越教育大学研究紀要』19(2), pp.631-651。  
 滝沢和彦（1986）「『コンダクト・カリキュラム』における「習慣形成」－「社会的適法」としての道徳教育－」『教育と教育思想』第7号，pp.14-22。  
 田中智志、橋本美保（2012）『プロジェクト活動：知と生を結ぶ学び』東京大学出版会。  
 Temple, A., “The Kindergarten -Primary Unit: Part I”, *The Elementary School Journal*, 20, 1920, p.504.  
 Thorn, Alice Green, (1929) *Music for Young Children*, Charles Scribner S Sons.  
 山浦菊子、中村千晶（2000）「幼児の歌う活動に関する一考察 その4の1－本学でなされてきた音楽教育について－」『聖和大学論集』第28号，pp.39-51。  
 山浦菊子、中村千晶（2001）「幼児の歌う活動に関する一考察 その4の2－2つのコンダクトカリキュラムを通して－」『聖和大学論集 教育学系』第29号，pp.95-108。  
 （主任指導教員 三村 真弓）

## 【引用文献】

- 阿部真美子・別府愛・滝沢和彦・菅野文彦編（1988）『アメリカの幼稚園運動』明治図書。  
 橋川喜美代（2003）『保育形態論の変遷』春風社。  
 Hill, P.S. (edit.) (1923) *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, Charles Scribner's Sons.